

## 二、長毛\*

わたしは故郷の陋屋の小さい中庭に立っている。中庭は長方形の石が敷き詰められ、北側の南向きの二間の“藍門”の部屋は、子京叔父がいつもここで『子史輯要』を筆写していた。——そしてまたここで狂った。西の端は一間の控えの間に、部屋の後ろは楊家の庭で、多くの破竹と一本の棕櫚が植わっていた。

これは“長毛のころ”である。みんなはすでに逃げ出したが、わたしは逃げないで、腰にはとても長い剣を帯びているかのようで、藍門の前の小さな中庭に突っ立っていた。初めは自分一人だと思っていたが、あとで中庭にはまだもう一人他の人間がいることに気づいた。つまり我が家で長年作男をやってきた“得法”——あるいは“得寿”と言うのかもしれないが——である。彼はいつもの夏のように、赤裸で、短いズボンを穿ただけで、猪八戒のような顔をわずかに俯けていた。わたしは彼に何も訊かず、彼も何も言わなかった。ただ憂鬱そうにだが悠然と立っていた。

たぶん午後六時か七時ごろだろう。彼は顔を上げないで、ただむにやむにや言った。

“来た。”

わたしも来たように思った、長毛が一人入ってくるのが見えた。いわゆる長毛とはどんな人間かわたしは見たことがなかったが、直感的に彼が長毛であることがわかった。たぶん短衣を着て青竜刀を手にした人間であったろう。そのとき、わたしは意識せずにすでに控えの間の中にいた。透かし模様の入った塀の後ろから覗くと、得法（あるいは得寿）はすでに恭しく地面に跪いて、手を後ろに回し、もっぱら長毛が彼を殺すのを待っていた。それからの様子は少しぼやけていて、まるで影絵芝居が中断したような具合だが、推察して見ると、どうやらわたしが駆け出して行って、長毛を殺したらしい。得法はポトンと首が地に落ちる音を聞いた。ゆっくり頭を上げて見ると、殺されたのが自分ではなく、長毛だということがわかった。そこで悠然と立ち上がり、悠然と出て行った。彼の遅鈍な目には感謝のしるしはなく、またなんの驚きもなかった。しかしわたしが余計な事をしたので、また彼に余計な面倒をもたらした。そういういかにも迷惑そうな表情がはっきりと読み取れた。

※初出：1922年8月20日『晨报副刊』

---

\* 長毛(チャンマオ) 太平天国の反乱軍を言う、長髪賊とも。